

海峰

氷見市立海峰小学校 学校だよりNo.5

令和5年9月26日 発行



学校長 西 裕之

寝食をともにすること

「校長先生、宿泊学習に行きたくないです。上庄小学校の人たちはどんな人たちか分からないから不安です。」

宿泊学習の3週間前、朝玄関に立っていると、6年生の児童が不安を伝えてきました。その日は、上庄小学校で3校合同交流活動がある日でした。会ったことのない友達と初めて会うことに、大きな不安と抵抗を感じていたのでしょう。交流活動では、宿泊学習の活動班に分かれ、自己紹介から始めました。多くの児童は、表情がこわばり緊張している様子です。その後、班で協力して新聞紙タワーを作ったり、クイズを考えたりする活動をしました。このような活動は「アイスブレイク」と呼ばれ、初対面の人同士が打ち解け合うのによく使われる活動です。

私は、学校に戻ってきた6年生の児童に「交流活動はどうでしたか」と聞いてみました。すると「意外と楽しい感じでした。宿泊学習が楽しみになりました」と笑顔で話してくれました。よい意味でちょっと拍子抜けしてしまいました。

3校合同宿泊学習のテーマは「交流」です。そのため、事前の交流活動を含め、活動プログラムは全て班やペアで「交流する活動」を仕組みました。また、班は固定するのではなく、活動によって変え、部屋では同学年の児童同士が交流できるように編成しました。コマ地図を見合って歩いたウォークラリー、仲間と協力して活動した自然体験選択プログラム、地図を見ながら暗闇を歩いたナイトアドベンチャー、役割を分担して作ったカレーライス。これらの活動を重ねるごとに、児童同士が自然に会話する場面が増え、3つの小学校が1つの団体になっていったように感じました。

このように、多くの活動を通して児童同士が交流できたことは、人と関わる力を身に付けていくという観点から、大きな教育的意義があったと感じています。そして、何よりも宿泊学習でしかできない「寝食をともにする」という経験が、子供同士の自然な関わりを生み、互いに理解し合う一番のきっかけになったのだと考えます。4度の食事を一緒に食べ、同じ部屋で同じ時間を共有し、大人の介入がない場所で子供の世界観で会話した経験こそ、かけがえのない「交流」になったのではないのでしょうか。

宿泊から帰ってきた翌日、6年生の児童に宿泊学習に行く前と後の心境の変化について話を聞いてみました。「たくさんの友達ができたし、すごく楽しかった」「もっと一緒にいろいろな活動をしたかった」「不安だったけれど、意外と何とかなるものだ」と笑顔で話をしてくれました。

本校のような小規模校の子供たちも、いずれは同学年で100人以上いる中学校に進学します。その場に本校の子供たちが身を置いた時、どのような気持ちになるのでしょうか。新しい生活への期待もあるでしょう。しかし、それ以上に不安の方が大きいのではないかと考えます。そうであるならば、小学校の高学年の時に、段階を経ながら新しい仲間を作る経験を積み上げていくことは必要なことではないのでしょうか。それが、「中1ギャップ（中学校の生活になじめない状況）」解消の一助となることを期待してやみません。

宿泊学習の最後の退所式。他校の友達とハイタッチをしたり、抱き合って別れを惜しんだりしている姿がありました。その姿を見た時、胸に熱いものがこみ上げてきました。

